

「成功回避動機」に関する研究

佐藤 公代

(教育心理学教室)

(平成14年10月17日受理)

Study on the Motive in Evading Success

Kimiyo SATOU

(問題と目的)

大日向(1993)は、「青年からみた社会の規制—性役割をめぐる諸問題」の観点から、以下のようにまとめている。ホーナー(1972)は「成功回避動機」という概念を提唱して、女性の成功に対する恐れを研究した。「一学期が終了したとき、ジョン(アン)は医学部で一番になっていることを知った」という短い刺激文を示し、その人物像、生育歴、将来の生活の予想等を回答させる手法であるという。その結果、「ジョンに対する男子学生の記述は、これまでの努力を評価し、将来を確信した回答が90.1%である。アンについては、女子学生の65.0%が否定的で悲観的な描写を行っている。」と言われている。「女性が優秀な成績を取ったり、社会的な成功を手にするのは、世間ではあまり評価されない。むしろ女らしくない人として疎まれる傾向がある。異性の友人や恋人もできにくい。そのために、有能な女性ほど成功することを恐れるようになる。」と言われている。筆者は「成功回避動機」の概念そのものから、このことは本当だろうか?という疑問から調べてみたい衝動にかられたのである。「成功回避動機」という概念は、1960年代後半から1970年代にかけてアメリカで指摘されたことである。アメリカの研究から約10年後に日本の研究がはじまるとして、1980年代に日本の追試が行われていると言う。「東(1979)は、早稲田大学の学生を対象に、男女とも次郎と恵子の両方に回答させている。」その結果、「男子学生の次郎に対する肯定的な評価が44%、否定的な評価が49%である。女子学生の恵子に対する否定的な評価は52%、肯定的評価が40%」になっている。筆者が関心をもったところは、現代において、「成功回避動機」という概念は死語になっており、肯定的評価と否定的評価は、ホーナーや東らの研究結果と一致しないであろう。そして、しつけとの関係で説明されるであろうということである。

仮説は次の通りである。

(1) 男女とも肯定的評価の方が否定的評価より高いであろう。

(2) 伝統的性役割観，両性具有論では，否定的評価より肯定的評価の方が，男子より女子の方が高いであろう。

(方法)

- 1) 調査期日：2002年5月15日
- 2) 対象者：E 大学学生63人（男子33人，女子30人）
- 3) 手続き：ホーナーの短文を用いる。しつけとの関係を見るため，幼児期から今までの育てられ方を5段階評定で行う。その際，理由も記述させる。

(結果と考察)

男女一緒の肯定的評価は70%，否定的評価は30%で，仮説(1)は支持される。次に，男女別の肯定的評価，否定的評価を示す。

男子では，肯定的評価が32%，否定的評価が21%，女子では，前者が38%，後者が9%で，どちらも肯定的評価が高いが，とりわけ女子において高くなっている。

以上から，時代とともに，ホーナーの「成功回避動機」は消えつつあるであろう。

次にしつけとの関わりで分析する。

男女別の「伝統的性役割観（男性はたくましく，女性は優しく）」と肯定・否定評価の関係を示す。

男子において「男性はたくましく」を受容したのが61%，わからないが24%，受容しないが15%，女子において「女性は優しく」を受容したのが63%，わからないが7%，受容しないが30%と，「伝統的性役割観」のしつけが多い。次に評価ごとに分析してみる。男子の肯定的評価において，受容したのが36%，わからないが18%，受容しないが6%，否定的評価においては，受容したのが24%，わからないが6%，受容しないが10%である。女子の肯定的評価においては，受容したのが50%，わからないが7%，受容しないが23%，否定的評価においては，受容したのが13%，受容しないが7%である。男子の受容度において，どちらの評価もそれほど差がないが，女子においては，約4倍ほど肯定的評価の受容度の方が高い。

さらに，男女別の「伝統的性役割観（男の子だから，女の子だから〇〇しなさい）」と肯定・否定評価の関係を示す。

男子において，「男の子だから〇〇しなさい」を受容したのが25%，わからないが42%，受容しないが33%，女子において，「女の子だから〇〇しなさい」を受容したのが70%，わからないが13%，受容しないが17%で，女子の受容度が約4倍も高く，「伝統的性役割観」のしつけが多い。次に評価ごとに分析してみる。男子の肯定的評価において，受容したのが18%，わからないが27%，受容しないが15%，否定的評価においては，受容したのが7%，わからないが15%，受容しないが18%である。女性の肯定的評価において，受容したのが53%，わからないが13%，受容しないが13%，否定的評価において，受容したのが17%，受容しないが4%である。男子の受容度において，約2倍くらい肯定的評価の方の受容度が高い。女子においては，受容度も受容しないも約3倍，肯定的評価の方が高い。

次に，男女別の両性具有論「男の子に負けるな，女の子に負けるな」と肯定・否定的評価を

示す。

男子において、負けるなと受容したのが12%、わからないが67%、受容しないのが21%、女子において、受容したのが23%、わからないが67%、受容しないが10%で、わからないが多かった。これは質問の受け取り方の認知がうまくいかなかったからであろう。わからないを除いて分析すると、男子は受容しないが約2倍、女子は受容したのが約2倍、高かったことから、親は女子にも仕事をと期待していたのであろう。さらに、評価ごとに分析する。男子において、肯定的評価において、負けるなを受容したのも受容しないのも9.5%、わからないが42%、否定的評価において、受容したのが3%、わからないが24%、受容しないが12%、女子においては、肯定的評価において、受容したのも受容しないのも10%、わからないが60%、否定的評価においては、受容したのが13%、わからないが7%である。肯定的評価においては、受容したのと受容しないのとでは男女とも同じであるが、否定的評価においては、男子が受容しないが約4倍、女子では受容するが約13倍も高くなっている。以上から、仮説(2)も支持される。親は男子には、女子との比較との期待度はもたず、女子の方には、男子との違いなど考えられず、負けるなというしつけのもとで、最近の女子学生の学歴の高さなどおしはかられるのである。女性も強くなったとか、高学歴になったとか言われるが、男女としてみるのではなく、人間としてみるべきである。筆者は、男女の違いは、極端に言えば、子どもを生めるかどうかの違いだけであって、あとはほとんど差がないと思うが、現実には体力の違いや脳の使い方や性格の違いなど、いろいろな現象の違いはあらわれている。現象の違いを差別ではなく、区別していかなければならない。その意味で「成功回避動機」の概念が使われないことが必要である。

(結 論)

- (1) 現代において、「成功回避動機」の概念は死語になりつつある。
- (2) しつけとのかかわりで「成功回避動機」の概念が説明される。

引用文献

- 大日向雅美 1993 青年から成人へ 発達心理学入門Ⅱ 無藤隆, 高橋恵子, 田島信元 編 東京大学出版会 88-89頁
- 大日向雅美 1988 母性の研究 川島書店